
TRUST OVER 30

美希マコト/味ノ素孝多郎/Mike June

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUST OVER 30

【Nコード】

N6217W

【作者名】

美希マコト／味ノ素孝多郎／Mike June

【あらすじ】

かつて世界は闇と溶け込み始めていた。絶望の中、世界を託された聖女、光の力を護りに変えた聖盾、そして強さのみを求めた聖刀。彼ら3人と聖剣の力が合わさり世界は光を取り戻したのであった。それから11年、平和を取り戻した世界はかつての絶望を忘れ希望と光で満ちていた。これは過去に英雄として崇められた聖刀使い「オーカ」と少女「ウミノ」との絆と心の成長を描いた物語である。テーマは『弱くてニューゲーム!』。著者3人によるファンタジーアクション?コメディ『TRUST OVER 30』 ※月一

更新という名の不定期更新

私の大好きな世界と、大っ嫌いな世界

「はぁ……はぁ、くそお」

屈んでいる状態さえ辛い。足は恐怖と疲労とで震えあがり、腕を上げるのすら死ぬ気で力を込めなければいけない。

（どうしたら勝てるんだ、この化け物に……）

世界を闇で覆い尽くし全てを手に入れんとする“デモニオ・クラウン”、奴の力は想像を遥かに超えていた。

「貴様ら人の力なんぞそんな物だ、どんな力を手に入れようと人の許容量を超える事はできないのだ」

歩み寄る、どっしりとした足取り。確実に近づくのは距離と死期、離れていく勝機と希望。

初めから無理だったのか。勝算なんて最初からなかったんじゃないか、そうだ俺たちは所詮不可能への挑戦をしてきただけなんだ。旅を通じてその0だった可能性は確かに1や2になったのかもしれない、けれどその程度だったんだ。俺たち人類はそうやって何度も繰り返したんだ。俺なら勝てる、俺たちなきつと勝てる……そう信じて最後には負けてきたんだ。

もう駄目だ。ミルに古代精霊を呼ぶ力は残ってないし、ホクトの聖盾ガーディアンも通用しない。今まで良くやったよ。よく耐えたよ、きつと皆も許してくれる、ここまで頑張ったね。ってきつと許してくれるさ。

「――終わりだ」

振り上げられた悪魔の大鎌ディアベルサイズ、闇に包まれる心と体は出口を見つめる事が出来ない――

「負けるもんかああああ……！！！！」

後方から轟く叫びにデモニオ・クラウンから一瞬隙が出来る、聖女“ミル”の天に翳した指先をまるで指揮棒タクトのように振り放たれるのは光の槍ルースランサー。一筋の光の槍がデミニオ・クラウンを霞める。

呆れたような表情を見せるデミニオ・クラウンは大鎌を振り下ろ

すのを止め、告げる。

「気づいているのだから、後は殺されるだけだという未来を——そして聖女を失った人類は希望を失い、闇に包まれる」

「させない!!」 ムンド・ルース・フエゴ・ビエント・アグア——
コイツ、この状態で古代精霊を呼ぶつもりなのか——!!

「馬鹿野郎! その状態で呼べばどうなるか分かっているのか!？」

「—————」
チラリと鋭い視線だけ送り、唱え続ける。

「もう魔法は使えなくなるんだぞ!! 分かっているのか!？」

「—————」
「お前は最後の聖女なんだ——お前だけでも逃げるんだ!!」

「—————うるさい!!」

下を向き怒鳴るミル。彼女の体は青白い光で包まれている。精霊が呼び出される。

「今しかない!! きっと今しかない!! あなたが倒すんでしょう!？」
!？ 平和な明日が来るんでしょう!？ そしたら、もう、魔法は必要なくなる!!」

もう無理だろう。俺もミルも、そしてホクトも全員が力を使い果たした。けれど俺たちのどんな技も通じなかった。

ボロボロになっても立ち上がるその精神力、コイツはいったい何なんだ。

14歳、たった14歳の小娘。俺はコイツに何度驚かされればいいんだろうか。

これが聖女の器だとしても言うのだろうか——いや、違うか。
初めて会った日、男と見間違えるほどだった短い髪は、今では肩につくほどまでになっていた。

いつも泣いていたのに。

知らなかった、コイツがこんなにも成長している事を……

「精霊アリス!!!! 汝の力で我らを救い給え」

ミルの周囲に突風が吹き荒れ、舞い上がる。

そして風隙間から現れる小さな少女。古代精霊アリス。

「その覚悟、しかと見届けたわ」

「頼むよ……アリス!!」

風と光の精霊アリスが唱える奇跡の力。

「全てを切り裂け——ルーストルメンタ光嵐」

「全てを切り裂け——ルーストルメンタ光嵐」

二人の声が重なり、凄まじい嵐がデモニオ・クラウンを飲み込んでいく。

「くらえええええ——旋風光影残滅撃」

「いけえええええ——旋風光影残滅撃」

舞い上がる嵐の中から重く、鼓膜が破けそうなほどの爆発音がした。

ズドンと思い重低音は嵐に亀裂を生み出し、やがて視界が開けた……その先に影一つ。

奴が仁王立ちしていた。

「未熟、精霊アリスが泣いておるわ——」

「っ————くるぞ!!」

今出せる精一杯の声で、危険を知らせる。しかし、間に合わない。

「旋風光影残滅撃」

その速さを捉える事ができない。次の瞬間には切り裂く風と光の炸裂。

そして視界が捉えたのは倒れるアリスとミル。

「その技はこういうものだ」

（コイツは……………っ!!）

心の底から何かが煮えたぎる、血が逆流する。
思い通り動かない体が齒がゆくて仕方がない。

「はぁ……はぁ、……大丈夫、僕が守るから」

フラフラと立ち上がっている、ホクトの右手が光を纏っている。

——聖盾

血だらけの掌はしっかりと正面を向けている。

僅かな力しか残っていない状態での障壁は本来の10分の1にも満たないが、確かに2人を包んでいた。

「無駄な足掻きを」

力を使いふらつくホクトが城柱にぶつかり、もたれかかる。呼吸は荒く、肩で息をしているのが分かる。

「はぁ……はぁ、がはッ」

吐血するホクトの姿。

ボロボロになっても立ち上がろうとするミルは、アリスが消えてしまわないように懸命に唱霊しつづける。

こんな時に自分は——自分は——

「……退け」

真横を突き進む一つの影。

「お……まえ——な、んで」

言葉が詰まる、なんでコイツがここに——ヒカル!?

「俺はお前たちに未来を託した……それは押しつけたんじゃない。今も皆が戦っている、それをお前たちはこの旅で見てきたんだろ、実感してきたんだろ——お前一人の世界じゃない、だからお前一人が戦ってるわけじゃない、忘れるな」

コイツが今から十分に戦えるはずがない。俺が自ら傷つけたボロボロの背中が物語っている。

この世で唯一ナイトの称号を手にした、悲しみの狼。さっきまで俺と刃を交え殺し合っていた、王の操り人形。

「礼を言う……俺にも人の血が流れていたこと思い出した——」

玉座に向かうヒカルが小さくなって行く……

——今、自分が行かなくていいのだろうか
(なぜ躊躇しているんだ)

——ヒカルだけじゃ絶対に勝てない

(それがどうした!?)

——きつと負ける

(だからなんだ!?)

——無駄なんだ

「まだ終わってない!!!!!!」

ヒカルがいる今しか——勝機はない!

「ホクト——守ってくれるか」

無理でもやらせる。チャンスはココしかない。

「まだ……やれるよ。もう1度……もう1度だけ、君を守る為の力を貸すよ」

「1度でいい、必ず決める——」

ずっと体勢を低くし目を閉じる。氣の流れと血ミユールの感覚——『瞬速』

「俺が隙を作る、まかせたオーカ——」

「——まかせろ」

まるでテレパシーのような会話。各々が役割を理解する。

「王よ——私の手で地獄に堕ちろッ!!」

忠誠を誓った証である白光の剣が反逆を示す。

上段から繰り出された一刀両断の太刀筋は王の地獄カオス・ディゲレンスの鎌により捌かれる。

「私が与えた力だ、主に勝とうなどと不可能だわッ!!!!!!はあッ
!!!!!!」

弾かれる。薙ぎ払われる——ヒカルは刈られる。

でも大丈夫、十分間に合う……間合だ。

「——こっちだ」

背後を取る。背中を見る。隙がある。

闇より生れし金色は 光を遮る物なりけり 悪魔を宿したその刃
怒りを遮る物なりけり 覇道を極めし破壊の杯 聖刀「祈誓」――
まるでそこにあるかのように、刀身を指でなぞる様にして長い刀
が具現化していく。

『聖なる刀』の名とは矛盾する漆黒の長刀、聖刀「祈誓」

構えは無い、今はヤツを叩き斬るのみ。

「我流電光――散れ」

早さという概念を無視した光速の剣技。その無駄の無さゆえ力は
刀身には伝わらず通常ダメージを与える事は出来ない――1刀の例
外を除いて。

聖刀「祈誓」は刀であって刀ではない。

己の聖心が築き上げる強さの証である。

強靱な心と碎けない信念、それらを耐えることの出来る器＝肉体
こそが聖刀「祈誓」である。

振り抜く刃先から疾風の如く放たれる無数の刃がデモニオ・クラ
ウンを切りつける。

「ぐうううああ！！！」

血しぶきが上がる。

ミルの精霊アリスが追い風を吹かせる事により――我流電光の早
さは通常の8倍を超える。

（しまった、浅い！！！）

慢心か、焦りか――決着を急ぐあまり、完全に間合いに踏み込め
ていなかった……しまった、と思った時には遅かった。

「くっ――」

氣勢を上げる奴の右に振った鎌の勢いがそのまま左へ戻ってくる、
遠心力を十分に使った捨て身のカウンター。

仰け反る体、体勢を立て直そうとする体。

遅い、マズい、やられる、間に合わない——確信する。

「守りの力、巨大な象をなせ——!!」

ホクトのガーディアンが目の前に現れる、が、消耗が激しい——
これでは!!

甲冑の鎧は簡単にバラバラなり崩れ地獄の鎌がそのまま自分の胸
に伸びてくる。諦めにも似た恐怖に思わず目を閉じてしまう——

——ここまでか。

.....

.....

しかし、その一撃が来ない。

痛みはないが、それほど一瞬であったのだろうか。もう終わった
世界なのだろうかと疑問が浮かぶ。

ゆっくりと、ゆっくりと目を見開く……

目は開いた。しかし視界には何も映らない。暗闇の世界……何も
見えない、何も感じない、何も匂わない、色の変化さえも何も世界。
先ほどとは違った恐怖である。理解できぬ事の恐怖心、分からな
い事が怖い。

ここは本当に終わってしまった世界なのだろうか——それとも始
まりの世界なのだろうか。何も生まれない世界に意味はあるのだろ
うか、自分一人の悲しい世界。

その時だった。

小さな星の欠片が目の前を流れていく。小さな小さな流れ星。
流れた星が足元に落下し——弾む。高く弾む。運動エネルギーを
無視した高さまで弾んだ星の欠片は2つに分離した。2つの星の欠

片が目の前を流れ落ちる。落ちる。弾む。高く弾んで今度は4つに分離する。

2つが4つに、4つは8つに……気が付くと周囲は小さな星々に囲まれている。闇の世界が明るくなっていく。

なんだかここはとても懐かしい……ここは何処だっただろう。思いだす。記憶の奥深くに手を伸ばし、触れる。

「そうか、行くのか……お前なんぞに期待はしていない。だが、目指す所は皆同じなんじゃ——」

これは、みなと村。

「あなたは戦う、私は踊る。やってる事は確かに違うわ、けれどこれが私なりの戦いな——」

これはアンサンブルタウン。

「はっはっは、威勢の良いガキだな！でもなあ坊主、勢いだけじゃどうにもならない物があんのよ。それ理解しね——お前は俺にかすり傷さえつけられねーぞ」

終わりの騎士アクセル。

「あなたが望むならば、世界はきつとそれに応えてくれます。それだけの器量があるあなた達にはあります。私たちが全力で道を切り開いてみせます」

王妃エレナ。

目をつぶると瞼の裏でこれまでの出来ごとが蘇る。

とても安らぐ。落ち着く。

——世界はまだ終わらない。

「あなた一人ではないわ。皆が今もそれぞれ戦っているのよ」

耳元で精霊アリスの声が聞こえる。

「あなたが背負った物は確かに大きいわ、けれど1人じゃないのよ。」

思わず、くつと口角が上が、僅かにではあるが上がってしまった。

色々な物が不確かな世界。

確かな物は自分だけだと思っていた世界。

——誰かの声はきつと力にならない

自分だけを信じていた。

それは世界で唯一確かな事だったから。

「分かった、気がする」

「——そう」

目をつぶっていても分かる、感じ取ることができる精霊アリスの微笑み。

「いける？」

問われる。

「いく」

応える。

瞳の裏側が明るくなっていくのが分かる。

世界が開いて行く。自らの心と共に。

旅の足跡と記憶。

そこで出会った人々の想い。

——願いと希望

（諦めたくなかった）

なぜ？

（それは……）

皆が笑って手を繋ぐ、そんな世界が見てみたくなった。
きつと出来ると思うんだ。

人は醜いし汚い。

こんな世界に価値はないと思っていた。

――見据える

知らない物は怖かった。

――捉える

だから力が欲しかった。

――踏みこむ

今、この感覚を俺は知らない。

――振り上げる

けれど不思議と、怖くはない。

――切りつける！！！！！！

願いを背負ったわけではなく、希望を重ねたわけでもない。

ただ、この世界の未来がもう少し見たくなったただけだ。

こんな世界が好きだったんだ――

「――はっ!？」

昔の夢を見ていた気がする……最近良く思い出に浸る事があるせ

いか。

確かにあった出来事であり、これからも語り継がれるであろう歴史の重要な一ページ。それを成し遂げたのは自分であった。

あれからというもの、俺は英雄だ英雄だと持て囃された。当然だ。有り余るほどの金、脅かされる事のない絶対的な地位と名声。欲しいモノは何でも手に入る、そんな暮らしをしていた。

世界は平和になった。

誰もが笑って過ごせる、剣も魔法も必要のない時代がやってきたのだ。

のだ。

のだが。

のだがだが。

11年、たった11年で、だ。

人々は俺の、俺様の栄光を忘れようとしている。なんと軽薄な人民。

（この幸せは誰のおかげだと言うのだろうか……俺、俺だよ……俺のおかげだよ……）

ドンドンドン……！！「いるんだろ、オーカ……！」

玄関の扉を殴りつけるな音と糞婆のどなり声が聞こえる。

「ちっ、恩知らずめが……」

仕方なく玄関の扉を開ける。

「ほら、滞納してる家賃払いなさい」

「……………この世界は誰のおかげで……」

「おだまりッ……！！！！ あんたねえ、いつまでそんな生活続ける気なのかい！？ かつての英雄の面影なんてどこにもないよ……！」

「おいおい、言わせておけば糞婆……」

「知ってるかいアンタ、巷では英雄のオーカは死んだって事になってるらしいよ」

「――なッ!？」

「まあ間違っではないよね、アタシもアンタが本当にオーカなのか疑いたくなってきたところさ」

「おい婆、貴様何を言う!! お前は俺を良く知っているだろう!？」

「だからこそ疑問に思ってるところさ、本物のオーカは死んで、アンタは偽物じゃないかってね」

「……………」

言葉が出ない。この俺に向かってなんとまあ無礼極まりない事を抜かしやがることでしょうか。

「いいかい、滞納してる家賃半年分、来週までに払うんだよ!! いかい!？」ボタン。

糞婆は勢いよく扉を閉め、帰って行った。

「ちっ、おんぼろアパートの管理人風情が何を……払えばいいんだろうが、払えば」

ゴミだらけの部屋の中から財布を見つけ出し中身を確認する……しかし中身は何も入っていなかった。

「あー、そう、あれだな、今丁度、“ちょうど”金がないんだった――誰かに借りよっと」

ゴミだらけの部屋の中から携帯を見つけ出し電話をかけようとする……しかし電話は使えなかった。

「あー、そう、あれだ、今だけ、今月だけ料金払ってないんだった――」

時間とお金。

この2つの条件が揃えば、人は簡単に変わってしまう。

豪遊に豪遊を重ね、感覚が麻痺し続ける生活を続けた。

まだ大丈夫、まだいいや、もういいや。そんな生活を続けていた。

次第に心の隙間が広がっていくのを感じていた。

その隙間を埋めるようにお金を使った。使って使って使いまくった。

「剣も魔法も必要のない世界か……」

——力だけしかない俺は、どうやって生きていったらいいんだろう
その想いが日に日に募っていた。

——戦うしか知らない俺は、これから何をしたらいいんだろう
必死に考えた、けれど何も思いつかなかった。

イライラした。でも、何もやる気は起きなかった。

「はぁ……」

ゴミだらけの狭い部屋。

傍にあったひび割れた鏡で自分の顔を見る。

（無造作に伸びた髪と髭……これ誰だよ）

自分でも、もう何も分らない。本当に自分なのだろうか、自分
とは何だっただろうか。

「俺は、俺はオーカ。世界を救った英雄だ……たぶん」

4年前に一度聖刀を出そうとしたことがある……結果は失敗した。
その時に、もう自分には何も残っていないんだと実感した。

コンコンコン。「あのーオーカさんいらっしゃいますかぁ？ KW
テレビの者ですが」

「来たッ！！！！」

久しぶりにテレビ局の人だ、なんだ？ レギュラーかゲストか！？
何でもいい、自分が誰であるかを客観的に確認させてくれるのであ
れば———あと金も！！ガチャ

「や、やぁ。KWテレビって言ったね、あれかな？ 久々に俺をレギ

!!!!」

「ひいッ——し、ししし、失礼しました!!」

(人を馬鹿するのにも程がある)

俺はそのプリントをもう一度見て……クシヤクシヤに丸めて投げ捨てた。

『あの方は今　　流行の先の闇』

この世界は嫌いだ。

そしてこの世界も俺を必要としていない。

「はぁ……面倒だな」

その場で横になってポリポリと頭をかく。

11年……気が付けば30歳だった。

——生きてるだけってこんなにも辛いんだな

プロローグ『私の大好きな世界と、大っ嫌いな世界』

私の大好きな世界と、大っ嫌いな世界（後書き）

『私の大好きな世界と、大っ嫌いな世界』

〔各役割〕

- ・ 美希マコト（本文）
- ・ 味ノ素孝多郎（肉付けアドバイザー（不完全）
- ・ Mike June（応援）

(1) 際会と再会は再開へ(前書き)

キャラ紹介その1

『オーカ』 30歳

・レベル「???」
ヒットポイント
・HP「???」
マジカルポイント
・MP「0」
・攻撃力「???」
・守備力「???」
・戦術力「???」
・速さ「???」
・精神力「0」
・気力「0」
・やる気「0」

・備考 「状態異常アリ……毒、麻痺、混乱、暗黒、病気、無気力、不運」

・解説 「かつて英雄と呼ばれた世界唯一の聖刀使い……たぶん。ただ怠けていた結果なのか、もしくは理由があるのかは不明だが過去の力はほぼ失われている」

・得意技 「脅し紛いの英雄英雄詐欺」

(1) 際会と再会は再開へ

苛立っていた。

「おい、ガキ」

「何よ」

不機嫌そうに対応する小娘。

「いい加減にしろよ、これで何度目だお前の手品が俺に当たるの」
背中の火傷がヒリヒリズキズキと痛む。

「あんたが、ちょこまか動き回るからでしょ!!」 あと、手品じゃなくて魔法よ!!」

「馬鹿野郎、こっちは近距離戦だ。仕方がねーだろ、相手はカカシじゃねーんだよ」

最初の頃、雑魚敵1匹に苦勞していた。

「だったらアンタ一人で戦えばいいじゃない!!」

小娘は泣き虫のくせに生意気だった。

「あ?てめ、コラ泣かすぞ。黙って俺の指示通り手品出しときゃいいんだよ」

「手品じゃないって言うてるでしょ、魔法よ魔法!!!!!!!!!!」

俺は訳が有って魔法という力を酷く拒絶していた。

結果、俺たちの相性はあまり良くなかった。

——けれど、俺はこの小娘に、人類の希望であり世界そのものを背負わされた聖女『ミル』に何度も助けられたのだった。

(煩い、なんか、とっても、とにかく煩い)

霧がかかっている様で有耶無耶な景色を覚醒しない頭で必死に考えて、結論を出す。それが意外と難しい。

「お前か……毎朝御苦労だな、もういい休め」

目覚まし時計は今日も元気だった。対照的に俺は、今日も何処か落ち着かない心の病を抱えているような感覚である。

平和な世界で平和な労働をし、賃金を貰い、そして生活をする。

夫は妻子を養い平和に暮らす。

「素晴らしきかな、この世界」

考えて出た言葉とは裏腹に、内心そうは思っていない。

『What's 平和な労働』これに尽きる。

突き詰めて考えるといつもここにたどり着く。働く？なんだそれは、と。

昔、旅をしていた頃は賞金や報酬を糧に生活をしていた。ある意味自給自足であった。

しかし俺の行っていた自給自足は常に『戦い』が前提条件だった。頭を使う事も確かにあったが……そういえば“あいつら”にまかせっぱなしだったな。

『働けよ、糞ニート』最近俺自身もそう思う日もある……たまに。でも考えてみろよ、かつての英雄が低賃金の肉体労働なんかやってみろ、どうなるだろうか……当然の笑い物だろ。

「ええ！？英雄って金ないんすか！？ハハハ」

「あの……食べかけですけど、おにぎり食べますか？」

「あんた冗談はいけねえな、オーカさんは今も何処かで旅をしているんだよ、きっと」

こんな事になりかねない。

立場ってもんがあるんだよ、あとプライド。

（昔は使いきれないほどの金があったはずなのにな……）

現在のみすばらしい生活を初めて5年が経つ。逆算すると俺は常

人なら使いきれないほどの金を6年で使い切った事になるのだ。

最初の3年くらいはまともだったんだがな……後の3年はもう思い出したくもない。

——俺は、世界に絶望していた

街中を歩くと、溢れる笑い声と人々で賑わっていた。

「商業街『ギルティ』」

かつてはホワイトアップルという国の中心的存在であった街だが、11年前“俺が”俺が、おお俺が世界を救う前、世界は壮絶な打撃を受けたことにより、現在は世界が一つの『国』となって機能している。これは人類史を賭けた戦いによる団結の結果と言ってもいい。

「う……日差しが痛い、溶ける」

なるべく日陰を歩く。気がつけば夜行性である。ボサボサの前髪は鼻の辺りまで伸びている為、幸せそうな人々を見るとなんか辛いので視界が塞がってちょうどいいから切ってない。

「……………ちっ」

舌打ち。無性にイライラしていた。

「……………っ!!」

こっちがわざわざ道の端を歩いていたというのに、誰かと肩がぶつかった、ウザい。

「ここは商業街ギルティ」

「ちっ、まるでモブキャラじゃねーか、気をつけろ!!」

イライラしながら今日の目的地へ着いた。

「ハコム ギルティ支店」

ハコムという名の無限増殖機関である。

『何の増殖?』答えは『金』である。俺にとっての希望の光だ。ここに来れば俺はたちまち一般的な生活レベルまでその水準を上げる事が出来るのだ!

「申し訳ございません、お客様はまだ前回、前々回、前々々回、前々々々回の返済が終了していない為——」

ご利用に審査があるのは本当の事だった。それに、重なった利子による圧倒的な数字羅列は俺が今までに見たどのモンスターの類よりも威圧感があった。

「ま、まあいいさ、とりあえず飯だ飯」

腹が減ってはなんとやら、ひとまず俺はツケの利く行きつけの定食屋へ足を運んだ。

こここの『とり天定食』は非常に美味である、それは俺を定期的に通わせるほどだ。これこそが希望の光だ、食はもはや命!!

「いやー、ごめんね。もう無理。ていうか、アンタほんとに“あの”オーカなのかい、最近、英雄オーカは旅先で命を落としたっていう噂を聞いたんだけど……」

希望の光、それは命の灯に等しい。

それが消えたとなれば、後は息絶えるしかない。

「……………死にたい」

金はないし、腹は減った。

高台から街を見つめる、状況は断崖絶壁である。

『おれ、俺だよ俺、オーカオーカ、英雄だよ英雄!?!』という英雄英雄詐欺的な作戦も、もうこの街では通用しない段階である。

他の町に移住したいが、引っ越しをする金はないし、体力もない。そもそも、今のアパート家賃すら払っていないのだった。

たるみかけたお腹に、『これは本当に自分ののか!?』と見るたびに疑ってしまう筋肉のついてない腕。

――俺は、生きる意味を無くしてしまっていた

そして意を決し、舌を噛み切って死のうとした時だった、視界に何かが映った。

「わぁ、これきれえー」

チビ助が1匹。しゃがみこんで野花を摘んでいる。

「えへへっ、ママ喜ぶかなあー」

なんとまあ、『トテトテ』と歩く姿が非常にイラっとする少女であるが……不思議と癒された。

「んんー、へへっ」

たくさん花を摘むことが出来たのか満足げな表情である。ほくほくとした表情である。

「――わわっ」

一々反応がオーバーなのが非常にウザいが、俺と視線が合ってしまい驚いた様子だ。

「んー、んんー」

首を傾げている、何か考え事でもしているのだろうか……。

「ん？」

チビ助がコチラにトテトテと寄ってきた。おそらく走っているのだろうが、遅い……あっ、こけた。

（なんか、見てて危なっかしいな、大丈夫かコイツ）

ようやく俺の目の前にチビ助がたどり着いた。

「いたたた……おじちゃん、はい、これえ」

頭を押さえ涙ぐむチビ助が差し出したのはさつき摘んでいた野花だった。とりあえず舌足らずなべしゃり方がイラッとする。

「は？何それ」

「お花だよお、きれえでしょー」

「んなことは分かってるつつーの、俺にあげてどうすんの？」

「ふえ、だってだって、おじちゃん心が汚れてそうだから、せめてもの気休めにいいかと……」

喧嘩を売られた気がした——が耐えた。

「……てめ………てめえ喧嘩売ってんのかコラチビ助ええ……！！」

我慢は1秒も持たなかった。

「ひゃあっ」

頭を抱えてうずくまるチビ助。

「大人をからかうんじゃねえ、分かったか!？」

10歳以下であろう少女に本気で怒る俺。

「覚えとけ、誰のおかげでお前が笑って過ごせるのか……俺だ、俺のおかげなんだからな!!!!!! ありがたく思え!!!!!!」

10歳以下であろう少女に対して容赦なく上下関係を突き付けようとする俺。

「だいたい、お前達平民は——あれ？」

説教タイムに入ろうとしたのだが、気がつくとうずくまっていた少女の姿がなかった。

「おじちゃん!!!! こっち、こっちいー!!!!」

「なぬ!？」

背後を取られていた。イラッとした。

「待ちやがれガキいいい!!!!!!」

「きちゃん、逃げろおー!!!!」

10歳以下であろう少女を追いかける俺。

変換…10歳以下の少女を追いかける30歳くらいの男性。

もっと変換…少女を追う中年ニート

—————なんだかとても危険な香り!!!!!!

「で、君は、小児性愛者……通称ロリコンであるがため、今回のような行為を犯した、と」

「違う、断じて違うよ!!」

不審がった通行人に通報された俺は警察署にて事情聴取を食らうハメになった。

「俺、俺だよ!! オーカオーカ、英雄だよ英雄!!」

「嘘を付け!! 性懲りもなく英雄を語りおって!! 第一、オーカ様だという証明すら出来ないではないか貴様!!」

「証拠……証拠証拠!! ほ、ほら、ここ、ここここサイバーバードに噛まれた傷」

左腕の傷を見せた。

「嘘をつけ!!」

「本人が本当だって言っただから本当なんだよ!!」

これでは平行線のままだ、何か無いのだろうか自分を証明できる物は、と必死で考える。

「仮に、仮にだお前が“あの”オーカ様だったでしょう。知っているか、オーカ様は英雄なんだぞ、なぜお前のようなみたいなみすばらしい恰好をする必要があるんだ、ん!？」

痛いところを突かれ、あやふやな回答をする。

「はい、ダウトオオオオ!! オーカ様の資産は使い切れないほどあるって話だ、つまりお前は偽物だ!!」

もう何もかもがどうでも良くなってきた俺は……カツ丼食べたい。そんな事を考えていた。

ちなみに、ロリコン罪（面倒なので略称）に英雄偽装・侮辱罪がプラスされていた。

30分の説教と10分の「今罪を認めれば」タイム、そしてまた30分の説教と10分の「今罪を認めれば」タイム。

このインターバルを何度か繰り返した時だった。取調室の重い扉

が開き、廊下の蛍光灯の光が部屋に射した。

扉の前には一人の若い青年が立っていて、俺を取り調べていたオヤジを呼びつけて耳打ちをする。

「なにっ、そうか……ヒソヒソ」

2分ほどヒソヒソした後、若造は去り、オヤジは態度を一変し——
「いやいや、この度は申し訳ございませんでした。数々の無礼お許しくださいませ」

事態が飲み込めなかった。

「いやあーまさか、あなたが王家の者だったとは、言っ下されば良いじゃないですか、このこのお!!」

王家の者? このジジイは何を言ってるんだ。俺は英雄オーカだぞ。
「ジジイ、俺オーカだけど」

「またまたあ、王家の者なら確かにオーカ様に憧れるとは思いますが、そういった冗談はほどほどにして下さいよお」

自らをオーカだと証明することは出来なかったのだが、なぜか帰れる事になった。

署の外に出ると、一面裕也家が広がっていた……訂正、夕焼けである。

「裕也家って誰の家やねん!! ビシィ」

軽快なノリツ（ノリツツコミの略）だ——はっ!? 誰かの視線を感じる、見られた!?

「おじちゃあーん!!」

ポムりと小さな肉の塊が飛び込んできた。本日の元凶チビ助である。

「ママになんとかしてもらおうように頼んじやったあ、へへ」

なんとかなるもんなんだろうか、いや、しかし実際になんとかなかったんだからいいか。

「おじちゃんごめんねえ、わたしのせいで“変態キチガイ中年ロリコンキモオヤジ”に間違われちゃって。えへへっ」

喧嘩を売られた気がした——が耐えた。

「……………耐えられるかボケがあああ!!!!!!」

「きゃん、おじちゃんこわぁーい」

俺の腕の中で耳を押さえ、目は『<>』こんな感じになっている。

「こちら、ウミノ、迷惑かけるんじゃないやありません」

後方より凜とした声が聞こえた。このチビ助の母親だろう、ここはビシツと言ってやらねば。

「あのさあ、しっかり面倒見ててくれないかな、俺大変だったんだけ…………」

その女性を見た瞬間、記憶が溢れた。

見て分かったとよりも、記憶による情報から理解した。という方が正しい。

コイツ…………コイツは——

「ミル…………なのか」

『（１）際会と再会は再開へ』

(1) 際会と再会は再開へ(後書き)

『(1) 際会と再会は再開へ』

〔各役割〕

・美希マコト(構成・監修・小ネタ)

・味ノ素孝多郎(本文)

・Mike June(肉付けする予定だったがノータッチ)

(2) 若い？2人の和解は会話回にて(前書き)

キャラ紹介その2

『大家(糞婆)』53歳

- ・レベル「10」
- ・HPヒットポイント「390」
- ・MPマジカルポイント「0」
- ・攻撃力「78」
- ・守備力「25」
- ・戦術力「0」
- ・速さ「15」
- ・精神力「150」
- ・気力「90」
- ・やる気「300」

・備考 「重量級」

・解説 「オーカの住む賃貸のアパートの大家である。優に一般人の強さを超えているのは、11年前に義勇軍の特別編成特攻隊第8部隊(菩薩)のアタッカーとして活躍した為である」

・得意技 「引っ越せ!!! 引っ越せ!!! 早く引っ越せ!!! しばらくぞッ!!!!!!」

(2) 若い？ 2人の和解は会話回にて

衣・食・住、この3つのどれが欠けてもならない事、誰しもが知る当然の事実である。

しかしこの中でもっとも重要な高い要素とはなんであろうかと考えるとなんか『食』なのではないかという結論に至る。

――その心は。

食べないと死にます。

さて、今日の前にある豪華絢爛の食を前にしてすべきことは唯一つであろう。猿でも理解するところ、人間様であるならば脊髄反射で無意識のうちに行動に出ているであろう。

目の前にあり一番右にある皿、これはから揚げに甘酢餡をかけた非情に食欲をそそる男らしい食べ物である。

スツと箸を伸ばし……食らう。食らう。

かぶりつき、咀嚼。甘酢餡が口いっぱいになり、脳までも刺激する――これは美味である。

余計な事は考えず、食らう、ひたすらに食らう。今自分がすべきことは目の前の皿達を残さず食べ上げる事のみであるところ偽りはない。今はただ、食べるためだけに生かされた身、もしくは食べるためだけに作られた機械のように、目の前のゴージャスな品々を食らい尽くす。

箸を休め、左手でスープを流し込む。鶏がらベースか、いやコンソメか……食の知識浅きゆえに判断は出来ないのだが、素人の自分にでもただ一つだけ理解出来ること、それは――美味である。その一点はまぎれも無い事実。

「あの、さっきから人の話聞いていますか？」

そういえば自分の向かい側と右隣りに誰かいるような気がする、しかも話しかけられているよう気までするが、今の自分には関係の

無い事である。今の自分は目の前の料理を——イでッ!!!!!!

「おじちゃん。いいかあげんにしないと、話のほーこーせい？ま
でブレちゃうよお」

右隣りのチビ助にスパーンと殴られたような気がしたが、今の自分には関係の無い事で——ウダッ!!!!!!

「……………」

一瞬何の事か分からなかった。目の前に星が散ったような気がして、最後に自らの瞳が捉えた物は……椅子を手を持った女性が自分の目の前に立っていた、という事である……ガクリ。

その後オーカの姿を見た物は誰もいない。

GAME OVER

「ってんなわけあるかッ!!」

「はいはい」

足を組んで見下すような視線をビームのように飛ばしている女性が円形のテーブルを挟んで向かい側に座っている。

「おじちゃん、これもらあうねッ」

右側にはチビ助が地面についていない足をバタバタとさせている。

「で、なんだミル。俺はこの料理を食べる事で忙しいんだが」

この料理はミルの奢りである。この料理はミル奢りである。すなわち「遠慮せずにたくさんお食べ」状態である。

「いえ、あの、確かに貴方にこの子をご迷惑おかけしたようですが、貴方の話は信じられません」

「おいおい、今さら何を言ってるんだ『ミル』、俺とお前の仲じゃないか『ミル』、そうけちけちせずにドンドン料理を持って来させる『ミル』」

「ちょ、ちょっとあんまり私の名前を連呼しないでください!!」

どうやら恥ずかしいらしい、というのは聊か冗談がすぎる。こいつ、ミルは大層な立場の人間である。聖女は即ち次期王女を示す。そんな立場の人間がこんな所で護衛も付けずに食事をするなどという事は一大事である。

「まあ、冗談だ。で、何だ？ いったい何が信じられんのだ？？」

ご対面から既に数時間ほど経過しているわけだが、どうもコイツは俺に対して疑いの念があるようだ。

「いや（呆れ）、だから……さっきから何度も言ってるじゃない」

「いや（否定）、そんなもん知らんぞ。上にスクロールしてみろよ、そんな話はないから」

「何の話をしているのよ!？」

「色々と超越した俺様だけに許された話だ」

「もお、おじちゃんもママもけんかしないのお!! かいそーを、わたしは、じゅんびするかあら!!」

——パネルでドン!! ココまでのあらすじ——

「お前……ミルか」

「はい、そうですけど」

「おおおおお!!!! ミルか、金くれ金」

「ちょ、ちょっと何ですか馴れ馴れしい!!」

「何だよ、忘れちゃったのか!？ オーカだよオーカ」

「は!？ ふざけないでください。確かにオーカはふざけた野郎でしたけど、そんなふざけた人相じゃなかったわよ!! もっとこう、目つきが悪くて、いつも気だるそうで……何かと語尾に死ね! 死ね! とかいふざけた野郎なんです!!」

「馬鹿、俺がオーカだっつってんだろ!？」

「だから、ふざけないでください。オーカは確かに変人でしたけど——」

というやり取りが路上で30分。

「ま、まあいいです。とりあえずオーカに詳しいみたいですし、ちよつと話を聞かせてもらいます。あと一応先ほどの件のお詫びも兼ねて」

「だあかあぁ!! 俺がオーカだつてんだろ———詫びは飯でいいぞ」

——いじょうが、がココまであらずじだよお——

「で、オーカが今どこにいるか貴方知ってますか？」

あぁ、その話か。確かにしたな。

「俺、俺俺」

「その手の詐欺は数年前に滅びたと聞いていたのですが」

「だから、俺がオーカだつて言ってるんだろ。何度も言わすな。飯が不味くなるだろうに」

数年間一緒に旅をしたはずの間柄というのに、なんて薄情なガキなのだろうか。まあ確かに御世辞にも仲睦まじく、互いに背中を預け合うような関係ではなかったにしても、否定の一点張りは無いだろう。

「はぁ、じゃあ仮に貴方がオーカだったとして——」

一度の溜息の後、呆れ顔で仮定の話題に入る。

「——何でそんな格好+顔をしているんですか？」

疑問は警察にも、そしてそれまでに何人も言われた事柄であった。「ママぁ、きつとおじちゃんは、『ろじょおせいかつしゃ』なんだよ!! だからこんな、きたらしい——アイタッ!!」

とりあえずチビ助を引っ叩いた。

「おい、コラ、てめ、どういう躰したらこんなガキが育つんだよ!」
「？」

「もお!! 人の娘を叩かないでいただけますか!？」
大丈夫? ウミ

ノ、あれはね『路上生活者』ではなく『変態』よ。近づいてはいけない人種よ」

ミルはウミノの頭を撫でながら優しい眼差しで訂正を加えた。

「ちげーよ!!」

「そおか、へんたいさんだったんだね。ママは頭がいいねッ!!」

「ふふふ、ウミノはきつと私より頭の良い子になるわ（よしよし）」
酷い教育現場を目撃した。

「で、お前なんで俺を探してんの」

俺は飯をかけこみながら、そもその疑問点を述べた。

「いや、だから……はあ。まあちょっとアイツに頼みたい事があったんですけど、なんか最近アイツが死んだって噂が流れているから確かめに来たのよ」

なるほど、なるほど。いやしかし。

「それじゃ護衛とかいない理由にならねーだろ」
そこ疑問。

「アイツへの頼み事がちょっと厄介なものでね、それでよ」

ほお、分けあり物件か。

「良かったな。でその頼み事とは何だ、場合によっては聞いてあげなくもないぞ。この場合というのは報酬の事を指すという事を念のため補足しておく」

「はあ——」

一度大きく溜息を吐いたミルは何かを諦めたようだ。

「——じゃあオーカ前提で話しますけど、『かぐや村』覚えてるわよね」

かぐや村……はて、そんな村あったか。

「あの、髭の村長の」

考え込む自分に更にヒントが与えられたが、思い出せそうで思いつけなかった。

「にせもの確定だねッ!!!!!!」

「もっと、もっと何かヒントをくれ!!」

チビ助による横からのチャチャを受け流し、情報を求めた。

「んんー、あ、ほら。アレよ!! 私に邪魔したアンタの背中に魔法が直撃した後直ぐに寄った序盤の村よ」

「ああ!!!!!!」

最後の一言で完全に思い出した。そんな事もあったなと記憶が蘇ってくる。

「てめ、あの時はよくも!! 見ろ、今でもやけどの跡がくつきり残ってんだぞ!!」

Tシャツを捲り上げ背中の火傷跡を見せつけた。

「ったく、あの時は自業自得だって——って、あんた……ええええええええええ!!」

ミルはまるで軟式ボールでデッドボール食らって骨折した人を見るように驚いた（実話）

「あ、あああ、あんた本当に本物だったの!？」

「最初からそう言ってるだろ」

「心が汚いヤツだとは思ってたけど……顔まで醜くなって」

「おい、てめ、こら。ざけんな」

「あれれえ、おじちゃんとママは知り合いだったのお？」

ひょっこりと2人の間にチビ助の華麗な割り込みはまるで「私が主人公よ」とても言わんばかりに画面中央にチビ助が出現した。

「アンタ何でそんな姿になっちゃったのよ、鏡見たの？」

ミルはバッグから取り出した手鏡を俺に向けた。そこに映っているのは——俺？

「なんだこれ、誰だよ」

薄暗い部屋では何度か見ていたが、明るい場所で自分の顔を見るのは久しぶりだった。

無造作に伸び放題のボサボサ頭に、繋がったもみあげと髭。

「まるで変態じゃないか。（もはやそう表現する他なかつ——）」

「——なくねーよ!!!!!!」

「アイタッ!!」

声色を変えたチビ助に鋭いツツコミを入れたのだが、それにしても今の声は自分の声と錯覚してしまうほど似ていた。

おや、気が付けばチビ助は赤い蝶ネクタイを口元に――

「ダメよウミノ!!」

さすがにそのネタはヤバいと気付いたのかミルがチビ助にストツプをかけ、何かやら耳打ちをした。

「これは、王家のひほー、その4672。ぼいすちえんじゃーなんだよ（目↓<>）」

スゲーな。王家の秘宝スゲーな。ていうか多すぎじゃね?という点はスルーすることにした。深入りは禁物なのでスルーすることにした。

「なあ、ミル。ところでコイツは何なんだ?」

ところで、ところで、だ。良く考えれば、いやよく考えなくとも一つの疑問があった。ミルはなぜこんな足手まといのチビ助の保護者みたいな真似をしているのだろうか。それが素直に口から出ていた。

「へ、コイツって……この娘の事?」

「ああ、そうだ。なんだ、王家は託児所でも始めたのか?」

「いやいや、私の娘だから」

なんだ、そうだったのか。それならそうと早く言ってくればよかったのに。

「……………」

なんだ、そうだったのか。それならそうと早く言ってくればよかったのに。

……………。

「なんだ、そうだったのか。それならそうと早く言ってくればよかったのに」

「ちよっとアンタ逆になってるわよ」

「え、お前の子供なの?」

「そうよ」

「もしかしてケコーンしたの？」

「そうよケコーンしたの」

.....

「ええええええええええ！……！！てことは、このチビ助お前の子供なのか！？」

「なによその、軟式ボールでデットボール食らって骨折した人を見るような驚きは……。さっきからというか、最初からそうって言うてるじゃない」

なんだ、そうだったのか。それならそうと早く言ってくればよかった——

「——とんだビツチだぜ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「なんて事言うのよ!! っていうか私もう25なんだからね、普通でしょ」

25……だと。そんなにも時は流れていたのか。まあそんなもんか俺だって30だしな。しかしコイツがケコーンとはねえ。こんな生意気女と共に暮らす覚悟があるやつがこの世界にいたとはなあ。

人妻ミル。順調に年を重ねたかつての英雄。

なぜだか俺は、時間に取り残された気分になった。

『(2) 若い？ 2人の和解は会話回にて』

(2) 若い? 2人の和解は会話回にて(後書き)

『(2) 若い? 2人の和解は会話回にて』

〔各役割〕

- ・ 美希マコト (監修・小ネタ)
- ・ 味ノ素孝多郎 (食事描写のみ)
- ・ Mike June (残り全部)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6217w/>

TRUST OVER 30

2011年9月21日03時33分発行